

『大南寔録』の成立過程（五）

——謝貴安『中国実録体史学研究』をめぐって——

Summary

On the Formation of *Dai Nam Thuc Luc* (大南寔録) (V): An introduction of Xie Gui-an, *Zhong guo shi-lu ti shi xue yan jiu* (謝貴安『中国実録体史学研究』).

A ten-year project on the compilation of the Qing Shi (清史編纂十年プロジェクト), sponsored by the Chinese government, is being under taken by scholars in China (mainland), Hong Kong, Macao and Taiwan. This project is expected to completed in 2013, the 100th anniversary of the Xin-hai Revolution (辛亥革命). This compilation, which will be counted as the 27th Official History (正史), is taking a “new synthesis” (新綜合体). Marxism historiography instead of the traditional form of biographical historiography (紀伝体). The above mentioned project has an influence on the research on Shi-lu (実録), the historical materials of Official History. This article intends to introduce Xie Gui-an’s new definition on the form of the Shi-lu, which he refers to as a chronicle form with additional biography (編年附伝体), one body with two wings (一体二翼) including 直書 (description based on facts) and 曲筆 (perversion of the truth), and furthermore, to examine the applicability of his definition on *Dai Nam Thuc Luc* (大南寔録), as well as the Shi-lu of the East Asian cultural or Kanji cultural area (漢字文化圏) in future research.

林 正子

一 『清史』編纂十年プロジェクトと実録

二 謝貴安『中国実録体史学研究』

三 「実録体」と『大南寔録』

四 東アジア漢字文化圏と実録

一 『清史』編纂十年プロジェクトと実録

『清史』編纂十年プロジェクトに筆者が関心をもったのは、ベトナムの実録である『大南寔録』について追究しているためである。中国で「清史改稿の動き」があると知ったのは、二〇〇二年六月七日の朝日新聞夕刊の「目立つ清史改稿の動き」(叢小榕)という短い記事によってであった。中国人民大学清史研究所などが「大型清史資料集」を編纂していること、『清史稿』に代わる史書・清史改編プロジェクトが検討中であることが分かり、衝撃を受けた。同記事が述べるように、中国では前朝の歴史を編纂すること(易代修史)は、現政権の正統性を証明する。その後、注意していたが管見のかぎり「清史改稿」関連の記事は、新聞に載らなかった。

二〇〇四年にはいり、『清史』編纂プロジェクト、枠組みと目録が原則的に確定」という記事を『中国図書』誌上に見つけた(七月号、チャイナ・ネット五月二二日の転載)。二〇〇二年末から着手された「大型清史」は『清史』と名付けられて、二十七番目の正史として「新総合体」が採用され十年計画での完成が暫定した、という。編纂計画の進展については、中国人民大学清史研究所教授張永江氏が、二〇〇七年一月一

日の山形大学公開講演で明確に述べている。^② 概略をみていこう。

いわゆる二十四史とは紀伝体の正史で、清の乾隆帝が『史記』から『明史』に至るまでを尊称したもの。その後、北洋政府が『新元史』を加え二十五史とした。北洋政府は一九一四年に清史館を設け、清朝の正史編纂に着手した。一九二八年五月に五三六巻の清史正本(関内本)が刊行された。『清史稿』である。同書は編纂官に清朝遺老を多く含み、内容の選定の当否や史料問題もあって「稿」字を冠せられた。七月、北洋政府を打倒した国民政府は、『清史稿』が事実に関せず、「反革命」「反国民」などの一九項を理由として一二月に発禁処分とした。

『清史稿』が発禁後も流通する一方、国民政府は台湾に移った後に「民族革命」の視点で清史を編纂することに努め、一九六一年一月に国防研究院は『清史』五五〇巻を出版した。『清史』は、わずか一年で編纂されたため『清史稿』の部分的訂正以上の内容はもたなかった。

中国では一九五八年以来、清史編纂が試みられたが、文化大革命終了までは軌道に乗らなかった。二〇〇一年、『清史』編纂プロジェクトの中心・中国人民大学清史研究所(清史編纂のために一九六五年設立)で清史編纂研討会が開かれ、翌年には国家清史編纂委員会が正式に発足した。『清史』と名付けられた史書は「新総合体」という体裁ばかりでなく、外国文献も史料とし、香港、マカオ、台湾の学者も参加するという新しい形で編纂が進んでいる。インターネット(中華文史網^③)による情報の公開と共有はその大きな特徴である。さらに編纂の過程で収集された史料は、『清史訳文新編』『清史訳叢』『清史研究叢刊』『文献叢刊』『档案叢

刊』『編訳叢刊』といったシリーズとして出版されているという状況である。

さて、『清史』編纂の副産物である「叢刊」類の公刊は、情報を世界と共有しようとする中国の姿勢の現れである。この情報公開は明確な意図に基づくことが、二〇〇六年の第三回清代檔案國際學術研討会（台北・国立故宫博物院で開催）の中国人民大学馮惠玲氏の報告「清代檔案の整合と共用——国家清史編纂プロジェクトから論する」⁴に明らかである。馮惠玲氏は、国家の十年プロジェクトを契機にして国内の史料収集が進み、文書館・図書館・博物館における収集や整理、情報交換が軌道に乗り、民間からも貴重な史料が国家に寄贈されている現状を述べる。さらに台湾との史料利用面での協力をあげ、清末から北洋政府期にかけて海外に流出した史料の現況を説明する。今後のとりくみとして国連の文化財流出に関する条約などに拠り、積極的に回収——原物でないとしても複写などの形で——を図る方針を明らかにする。中国自らはインターネットで情報公開中であることを述べ、報告を終わっている。

正史の史料として位置づけられる実録は、明・清二朝のものが伝存する。正史完成後の実録は焼却されるため、民間に鈔本が多く伝わる『明実録』、北洋政府が接収した『清実録』が例外として残ったのである。実録は、二〇世紀後半から檔案が利用できるようになる迄は史料として価値が高かった。編纂物とはいえ明代に長期間にわたって起居注が廃止されてからは、もっぱら詔令・奏議・檔案を史料としているからである。

今年（二〇〇八年）十一月八日の東方学会「第五八回全国会員総会」

で中見立夫氏は、「日本の東洋史学者と『実録』」と題する講演を行なった（内容は三節を参照）。中見氏は次の言葉で講演を結んでいる。⁵

中国、朝鮮半島、ベトナムにおいては、王朝体制は消滅し、「実録」編纂の伝統も存在しない。さらに朝鮮、ベトナムは、いまや漢字文化圏に属しているとはいえない。日本では天皇の「実録」編纂が伝統的・継続的におこなわれていた訳ではなく、近代天皇制のもとで制度化されたが、「昭和天皇実録」編纂事業の開始や「大正天皇実録」の公開などにより、実録に対する関心は高まっている。一方、中国では「実録」の次の段階として、「正史」つまり「清史」編纂が国家プロジェクトとして進行中である。

「文化事業の三峡ダム建設」⁶と称される『清史』編纂十年プロジェクトは、改革开放政策の進展、香港、マカオの復帰や中台間の学術交流といった背景で実現をみた。正史、実録といった伝統的史書への関心は、正史の紀伝体に比肩するものとして実録の「実録体」という提起もうんでいる。本稿では「実録体」を提起した謝貴安『中国実録体史学研究』を紹介し、『大南寔録』理解の一助としたい。

二 謝貴安『中国実録体史学研究』

国家清史編纂委員会が正式に成立した翌年の二〇〇三年、謝貴安氏が「国家社会科学基金一般項目（03BZS001）」を獲得して「実録体」を提起する著作を発表した。『中国実録体史研究』である。

同書は、二〇〇七年に武漢大学出版社から「武漢大学学術叢書」の一

冊として刊行された。武漢大学歴史学院教授謝貴安氏の実録研究は、一九八〇年代にさかのぼり、一九九〇年代には『明実録類纂 湖北史料卷』（李国祥編 武漢出版社 一九九二）に始まり、博士論文『明実録研究』（台北・文津出版社 一九九五 湖北人民出版社 二〇〇三）と発展した。これら明実録の具体的研究を基礎として、「実録体」および「実録体史学」の存在が提起されたのである。

周知のように中国史書の体裁は、紀伝体・編年体・紀事本末体の三体系とされてきたが、謝貴安氏は、史書の独立した体裁として「実録体」を提起した。標準的な「実録体」は「編年附伝体」であり、「実録史学」に内在する矛盾の結果として直書曲筆が「一体二翼」を形成するという。以下、武漢大学出版社によって「実録体」（第一章・第五章）にしばって内容紹介を試みたい。

『中国実録体史学研究』は全五六三頁におよぶ大著で、十章および序言・後記、参考文献からなる。篇別構成は次のとおりである。

序言 未開発の肥沃な地

第一章 叙事史学時代と実録体の歴史的位置

1 口述史学から記述史学へ 2 六家二体と実録体の出現 3 実録体の特殊な価値と歴史的位置

第二章 実録の起源と定型

1 実録体の起源は南朝梁 2 実録の発展の第一ピーク——『唐実録』

第三章 実録の継続的發展——五代・宋・遼・夏・金・元の実録

1 五代実録 2 『宋実録』 3 遼・夏・金・元実録
第四章 実録の全盛と衰微

1 実録の発展のピーク——『明実録』 2 実録の終末——『清実録』
第五章 実録の主題、体裁と体例

1 実録の主題思想 2 実録の「編年附伝」式体裁
第六章 実録の直書曲筆の対立と統一

1 直書曲筆は中国伝統史学に内在する基本的矛盾 2 個人の恩怨と実録の曲筆 3 実録編纂過程における党争と曲筆 4 実録編纂過程における直書曲筆の対立と統一

第七章 実録の編纂機構および管理制度

1 歴代実録の編纂機構 2 実録編纂機構の管理制度

第八章 実録史料の出所と変遷

1 実録編纂の史料備蓄制度と史料の出所 2 実録史料の変遷とその影響

第九章 実録編纂の社会史的考察

1 実録編纂と少数民族政権の漢化 2 実録編纂と史学世家

第十章 実録体史学遺産の揚棄と継承

1 実録体史学の残滓の排除 2 実録体史学の精華の継承と発揚

参考文献

後記

序言では本書の構成と方法論が述べられる。実録の定義、先行研究に

ついで「実録体史学」を論じ、本書の特徴として一次史料（文献・電子史料）の使用が強調される。

実録とは「摠実直録」を意味するが、南朝梁以降は「皇帝の実録体史書」をもつばら指す。北斉の『中表実録』から清の『桐城名宦鄉賢実録』まで実録の名称をもつものの、方志、特定地域の人物、一家の史事、役所の史実や科挙などを内容とする書物がある。これらは実録の名称を名乗るが「実録体」ではない。⁽⁸⁾

「実録体」とは「編年附伝体」⁽⁹⁾であり、南宋の陳振孫『直齋書録解題』巻五「起居注・建康実録」、晁公武『郡齋讀書志』巻二「実録類」に著録されたのが初めである。元・清の実録は附伝を欠いた変体である。⁽¹⁰⁾詔令・奏議などの檔案を主要内容とし史料性をもつ史書で、基本的には同一王朝の後代の皇帝が先帝の死後に編纂、あるいは少数ながら現皇帝自らが編纂している同時代史である。⁽¹¹⁾後の王朝が前朝の皇帝のために補修した近代史もふくめて、南朝梁から一四〇〇年余り歴朝の帝王は基本的には実録を編纂した。⁽¹²⁾実録は官撰の史学の厚い基礎となり、国史・正史の基本史料であるため、「実録体史学」は中国史学の重要な構成要素である。⁽¹³⁾「実録体史学」とは何を意味するのだろうか。前掲の序言の「中国史学の重要な構成要素」と述べられている他に、本文中に明確な説明はない。しかし、目次の前におかれた「内容紹介」に

本書は「実録体史学」の最初の専門書である。「実録体」の性質・体裁・編纂過程、編集機構、家族（史学世家）による史書編集、直書曲筆、史料の出所、価値の継承など一連の問題をマクロおよびミク

ロの視角で検討する。

とあることから、「実録体史学」とは「実録体」を研究対象とする史学と解されよう。

先行研究の特徴としては明・唐の実録への関心が突出し、五代についての研究が乏しいことが指摘される。中国では一九三〇年代に研究が始まり、重点は唐、ついで宋・金・元に置かれる。明についての成果は比較的多く、清がそれに次ぐ。海外では一九三〇年代から五〇年代の日本、ドイツのウォルフガング・フランケ（一九六二）の研究と一九六〇年代以降の台湾がとりあげられる。専著としては謝貴安『明実録研究』、陳捷先『滿文清実録研究』（台北 大化書局、一九七八年）を数えるのみである。

謝貴安氏があげる本書の特徴は、以下の三点である。⁽¹⁴⁾（一）「実録体史学」理論として標準の「実録体」は「編年附伝体」であるが、元・清という少数民族政権では一種の変体として編年体とられたことを指摘した。実録にあらわれる「直書曲筆」は、編纂における基本矛盾であり「二翼」をなす。曲筆の範囲と限度を明確に指摘することで実録の基本的価値を認め、「実録体史学」遺産の揚棄と継承を論じた。（二）従来、専門の論著を欠いた五代・西夏の実録について追及し、さらに北斉『皇帝実録』の性質、唐『高宗実録』の成書年代、宋『孝宗実録』の編纂開始年代について具体的に検討して見解を述べた。（三）「実録体史学」について全面的で系統的研究を行ない、編集機構、史料の出所と変遷や編纂過程における党争などを検討した。研究方法としては、伝統史学の考証と史料処

理方法とともに政治史、社会史および統計学の方法を用いた。例えば政治史では直書曲筆と政局の關係、とくに実録編纂と党争の關係、社会史では家族(史学世家)、少数民族の漢化と実録の關係を分析した。統計学を使い、唐『順宗実録』の七人の伝記を『宋実録』(『名臣碑伝琬琰之集』所収)の二六人と比較した結果、人物伝が占める分量の多さから「実録体」を「編年体」とするのは不適切であると指摘した。さらに宋『太宗実録』残本に拠り、当時の節烈觀念が後世の理学全盛期より薄かったことも指摘する。

以上の三点が本書に占める割合を頁数で比べると

(一)第一章―第四章 実録の起源と変遷(敦煌―梁―清) 第四章付表

「歴代実録一覽表」 24%

(一)第五章―第八章 「実録体史学」 48%

(三)第九章 社会史的考察 11%

(一)第十章 遺産の揚棄と継承 17%

となる。「実録体史学」遺産の揚棄と継承」とその前提となる「編纂機構と管理制度」「直書曲筆の対立と統一」が重視されている。いずれも中国史学の問題点をふくみ、さらに現在、進行中の『清史』編纂十年プロジェクトと密接にかかわるものだ。とくに第十章の指摘する「実録体史学」の精華の継承」は、(1)中華文明の精神を重視する、(2)中華の伝統的美徳(中華孝道・舎己為人・家庭和睦・信義・舎生取義・移風易俗)の伝統精神を継承する、(3)「以史為鑑」の実用精神を発揚する、(4)直書意識を鮮明にする、(5)編纂の管理経験に学ぶ、の五項目をあげ、大型史書

の編纂事業への具体的提言となっている。⁽¹⁵⁾

以上のように謝貴安氏の著作は、実録についての歴史や編纂制度を網羅した初めての専門書であることは否定できない。惜しまれるのは、一次史料をふんだんに用い資料集の役も果すが書名索引が無いこと、附表の「歴代実録一覽表」⁽¹⁶⁾に各書の伝存状況が記されておらず、利用に不便なことである。

以下、いくつか筆者の気づいた点について述べてみたい。第一に『明実録研究』では「編年体・紀伝体・紀事本末体を総合して形成した編年体史書」⁽¹⁷⁾とした実録の定義を捨て、「実録体」を提起した理由の説明を欠くこと。伝存する実録は明・清二朝であり、他の王朝の実録は部分的に残るかあるいは輯録されたものである。そこで「編年附伝体」の標準体『明実録』、変体としての『清実録』という規定に疑問を感じえない。第二に「以史為鑑」として唐代に「実録は、帝権強化を特徴とする中央集権制を代表する手段となった」⁽¹⁸⁾と指摘するが、実録編纂にあたるマンダリンについては「臣下」とのみ位置づけている点である。中国の正史についてE・バラッシュが、「官人のために官人による官人の歴史」⁽¹⁹⁾と評しているように、官僚制との関わりでの検討が不可欠であろう。第三に元・清に対する少数民族政権の「漢化」という視点は、さらに追究されるべきである。『清実録』は満州文・モンゴル文も漢文と並んで正本である。三言語による実録は、内容における異同が問題とならないか。⁽²¹⁾第四に東アジアの漢字文化圏との関わりが、朝鮮について簡単にふれられているのみという点である。⁽²²⁾元・清を少数民族政権の漢化と位置づけるために

は、『朝鮮実録』『大南寔録』も視野にいった考察が必要ではないか。

三 「実録体」と『大南寔録』

前節で紹介した謝貴安氏の提起した問題のうち「実録体」、同時代史、直書曲筆を中心として『大南寔録』を検討してみよう。謝貴安氏は中国史の問題として「実録体」を提起したが、東アジアには実録と呼ばれる史書が存在した。「東アジアにおける『実録の編纂・出版と日本人』という主題で二〇〇〇年から研究に従事している中見立夫氏は次のように述べている。⁽²³⁾

儒教漢字文化圏アジア諸国（中国、朝鮮、ベトナム、あるいは日本も）においては、王朝のなかに修史官がおかれ、歴代皇帝、国王の事蹟が編纂された。この皇帝、国王ごとの編年体歴史記録を「実録」（ベトナムの場合は「寔録」とよぶ。文書史料にもとづく歴史研究が発展した今日では、基本史料としての「実録」の地位は低下したものの、依然として参照すべき価値は少なくない。一九世紀の末から二〇世紀の初頭、日本で「東洋史学」が成立したころ、ヨーロッパには「東洋学者」はいたが、「東洋史学者」は存在しなかった。日本人東洋史研究者が、史料としての「実録」へ注目したのは当然であった。「大清実録」、「朝鮮王朝実録」、「大南寔録」、これらを出版して世界の学界へと提供する事業に、日本人学者が深くかかわっていることは注目される。

中見氏の問題関心は、もっぱら近代日本における東アジアの実録公開

という世界の学界への貢献に力点がある。『朝鮮王朝実録』（京城帝国大学が太白山史庫本を写真版縮刷、一九三二年）、『大清実録』（日滿文化協会編纂で奉天故宮崇謨閣蔵本を写真版縮刷、一九三六年）『大南寔録』（松本信広が版木から六部を刷らせ日本の大学・研究機関に配布、一九三六年。戦後、松本は写真版復刻を企図し、慶應義塾大学が刊行、一九八一年）と次々と公開された背景には、実録原本を読解し入手し自由に使用し得る状態が、日本人研究者に保障されていたことがある。言い換えれば、日本人研究者には実録原本を自由にする力があつた、ということである。その自由は、日本のアジア侵略、植民地化とは不可分であろう。

日本人が公開した三実録について中見立夫氏は、中国・朝鮮・ベトナムそれぞれの特徴を述べている。⁽²⁴⁾ まず実録の定義を掲げ

東アジア儒教・漢字文化圏において、王朝の修史官により漢文で編纂され、皇帝ないしは国王一代ごとに、事績を編年体でしるした、史書・保存記録。

中国 南北朝時代の梁代に「実録」編纂ははじまるといわれるが、隋代に定着。現存するのは明朝以降。皇帝の「起居注」を中心に「実録」が編纂され、王朝滅亡後は「実録」をもとに「正史」が後継王朝によってつくられる。

朝鮮 高麗時代に「実録」編纂ははじまる。現存するのは「朝鮮王朝（李朝）実録」のみ。活字で印刷され、編纂のための資料は廃棄（「洗草」）。辺鄙な場所に設置された「史庫」で保管。⁽²⁵⁾

ベトナム 陳朝時代には「実録」編纂がおこなわれている。阮朝明命帝

のとき「大南寔録」編纂を開始。嘉隆帝以前の時期については「大南寔録前編」とし、嘉隆帝以降、「景宗純皇帝寔録」（同慶三年（一八八八年））までの時期を「大南寔録正編」。后妃、諸臣などの「大南列伝」を付しているのが特徴。木版で印刷され、版木はフエの王宮内で保管。

と簡単に紹介し、編年体を共通点とみる。

さて、筆者はこれまで四回にわたって『大南寔録』の成立過程について検討してきた。（A「道光五旬節慶賀使節を中心として」 B「フランス支配下における変質を中心として」 C「阮朝の編纂事業を中心に」 D「『正編第四紀』の黒旗軍記事にみる編纂意図」⁽²⁶⁾）。その結果、『明実録』をモデルとし、大型の漢籍編纂事業の一環である『大南寔録』は、フランス植民地支配下で変質したこと、編纂担当のマンダリンによって記述が歪められたことが明らかになった。

以下、『大南寔録』の特徴について中見立夫氏の説明を補足し、ついで筆者がかかえる問題点を謝貴安氏の提起にそって検討してみたい。

一八一一年に嘉隆帝が編纂を命じた阮朝の寔録は、明命帝に引き継がれ『明実録』の体例に越南史書の独自性を加え、一八三五年の原寔録をへて、一八四四年に『大南寔録』として成立した。その際、明命帝は自らが史筆をとる欽修という形で皇帝権を行使した。欽修は、紹治帝、嗣德帝と継承されて嗣德期には寔録の過半の刊行をみた（表参照⁽²⁷⁾）。

嗣德帝の死後、三年間に四人の皇帝が廃立され、一八八八年にフランスの同意の下、同慶帝が即位した。阮朝がアンナン保護国としてフラン

表

| 書名 | 皇帝名（①～⑫は継承順を示す） | 巻数 | 刊行年 | 景印版巻数 |
|---------------|---|---------------------------------------|--|--|
| 大南寔録前編 | 広南朝 九代 阮朝 | 一二巻 | 紹治四年 | 一 |
| 大南寔録正編 | 嘉隆①世祖高皇帝（一八〇二～二〇） 明命②聖祖仁皇帝（一八二〇～四〇） 紹治③憲祖章皇帝（一八四一～四七） 第三紀 第四紀 第五紀 第六紀 | 六〇巻 三三巻 七二巻 七〇巻 八巻 一一巻 | 嗣德元年 嗣德一四年 嗣德三〇年 成泰六年 成泰二年 維新三年 | 三十四 五十一 一三十一 一五十一 一九 一九 |
| 大南列伝前編 | 同慶⑨景宗純皇帝（一八八五～八八） | 六巻 | 嗣德五年 | 二 |
| 大南正編列伝初集 | 阮朝 嘉隆 明命 | 三三巻 四六巻 | 成泰元年 維新三年 | 四 二〇 |
| * 附記 ** 附編 | ⑤瑞国公膺祺（一八八三～八三） ⑥廢帝朗国公（一八八三～八三） ⑧出帝膺蹕（咸宜帝）（一八八四～八五） | | | |
| 鈔 本 | ⑩成泰（一八八九～一九〇七） ⑪維新（一九〇七～一六） ⑫啓定帝（一九一六～二五） | 二八巻 一〇巻 | 嗣廢帝 | |
| 第六紀附編 | | | | |
| 第七紀 | | | | |

ス領インドシナ連邦の一部と化したことは、『大南寔録』の変容をもたらした。すでに『第四紀』編纂の時点で建福章程によって欽修は有名無実化していた⁽²⁸⁾。『正編第四紀』には附記が設けられ『第五紀』にいたっては附編が加えられ、前編正編構成が否定された。

『第四紀』では瑞国公・朗国公を本紀（嗣德）の附記とし、かろうじて

前編正編の枠内に留まった。しかし、『第五紀』では反フランス運動の核となった咸宜帝の附紀はたてられなかった。フランス統治下における阮氏の継承を記録するためには、新しい原則が必要であった。正閏を原則として取り入れ、『大南寔録』は継続する。伝統的に重視されてきた『資治通鑑綱目』の史観をかり、附編を創出し『第六紀』でベトナム史書の伝統として位置づけを明確にした。⁽²⁹⁾

同慶帝の寔録である『第六紀』では、もはや大清算号をとらず西暦で紀年する。『第六紀』以後も寔録は編纂されたが、成泰・維新両廃帝（『第六紀』附編）および啓定帝（『第七紀』）の寔録は、刊行されることなく鈔本のまま残された。一九四五年に退位した保大帝（一九二六年即位）についても日々記録がつくられており、阮氏の寔録編纂に対する強い意志が知られる。⁽³⁰⁾

『大南寔録』は、中国の寔録に無い特徴も持つ。そのなかで欽修・前編正編構成・卒伝と独立伝についてみていこう。明命帝は欽修（皇帝自ら史筆をとる⁽³¹⁾）を創始し、史官の先頭に皇帝がたち「褒貶の権」をも握る点で、科挙官僚の完全な掌握を図ったともいえる。欽修を可能とした一因は、阮朝マンダリンの漢学の浅さにもあった。

前編正編構成は、⁽³²⁾ 広南朝九代と阮朝皇帝との関係を明示する。その端緒は玉牒編纂総裁の范登興によって開かれた。かれは寔録副総裁も兼ねており、玉牒を前紀正紀（明命二十年前編正編と改称）の二部構成で編纂した。阮潢以前の確実な資料を欠く祖先を前紀に、阮潢を太祖とする広南朝の諸王を正紀に編んだのは、資料の有無を基準とするとともに

『大越史記全書』の外紀・本紀の別を念頭においたものと言えよう。明命五年に玉牒の草本が進呈され、翌六年に范登興は没したが前編正編構成は『大南寔録』に継承された。

『大南寔録』が独立した伝を持つことは、中見立夫氏の指摘するところである。一方、謝貴安氏は『明寔録』は「卒伝」の形で伝をふくみ、「編年附伝体」＝「寔録体」であると指摘する。『清寔録』は独立伝をもち変体とされるが、『大南寔録』は卒伝と独立伝の両者を持つことも特徴の一つである。謝貴安氏は、編年附伝体が紀伝体よりも皇帝へのマンダリンの臣従度が徹底しているという。⁽³⁴⁾ところが『大南寔録』では、「編年紀伝の体裁を兼有する」と上表（『前編』・『第三紀』・『第四紀』）に明記され、上論も認定している（『第六紀』⁽³⁵⁾ 編年体（中見立夫氏はじめ多くの研究者が、寔録の体裁として認める）による中国型寔録とは異なる独自性が主張され、それは『第六紀』まで貫徹されている。

阮朝は広南朝にさかのぼる系譜をもち、欽修が代表する強い皇帝権を寔録の名称に残している。すなわち最初から総称として『大南寔録』をもち、正編の各紀は皇帝号をとっている。たとえば『大南寔録正編第一紀』は「世祖高皇帝寔録」である。これは『朝鮮王朝寔録』が『李朝寔録』とも称され、『太祖寔録』『太祖康献大王寔録』にみるように大王号はとるものの皇帝号はとらなかったことと対蹠的である。阮朝は、ベトナム史に一貫する北の中国への強い対抗意識を継承している。すなわち北帝＝中国皇帝に拮抗する南帝＝ベトナム皇帝という意識だ。明命帝は一八三九年には大南国を名乗る。満州族政權清朝に対しては「中華」を

自認することは、朝鮮と同じである。

さて、筆者は『大南寔録』について検討するうちに、秘書とされる実録の読者は誰かという疑問をもった。謝貴安氏は前掲書で実録は、古代の皇帝にとって「自身と子孫の政治教科書、決策の根拠」であると述べている。『大南寔録』は、明命期に阮氏政権の「国家の大典」として確立された。しかし、『第五紀』の上巻・上表では「大南の正史であり大典である」の語が消え、代わって「皇帝を讀者とし、不朽」とである⁽³⁶⁾が現われる。「皇帝を讀者とする」といい「不朽」といい、それらは阮氏の家譜にふさわしい言辞である。

フランスによって正統性を保証された同慶帝は、父祖がそうであった「大南皇帝」ではなく、国土の過半を失い中折に逼塞する阮氏の族長にすぎない。しかし、あたかも阮福映が雌伏二十五年で全土を再統一したように、フランス統治下をもちこたえれば、主権者としての阮氏の復活の可能性を将来に残せよう。そのためには祖先に孝をつくし加護を求める必要がある。自己の政権の最後の拠り所を「広南国主阮氏」「中興者阮福映」に求め、「阮氏的不朽」を課題とする同慶帝は、最も重要な人民の支持を失なっていた。阮期の正統性は「社稷」ではなく、「孝によって保たれる家」に置かれ、『大南寔録』は「阮氏の家譜」に変容した⁽³⁷⁾。以上、『大南寔録』の体裁は「実録体」と合致しないこと、同時代史であるためフランス植民地化を境として「国家の大典、正史」から「阮氏の家譜」に変容したことを指摘した。

最後に中国の実録と共通する直書曲筆について検討してみよう。謝貴

安氏は、中国では直書曲筆は儒学に基づき伝統的史書に共通するとし、「実録体」においても「一体二翼」であるという。そして「一体二翼」は、史官が皇帝の専制を抑制し、曲筆も史徳による自律性をもつと認める。史官の最大の武器として微言が位置づけられる。

「顯親尽孝」は、謝貴安氏が「実録の中心思想」としてあげるものである。「尊者諱」「親者諱」の例は、明・清の実録で証明されているが、『大南寔録』場合は「子為父隱」が注目される。『第四紀』に記録された劉永福と黒旗軍は、フランス支配下で寔録を編集した阮朝マンダリンによって歪められた姿を残している。

『第四紀』が嗣徳期の反フランス戦争責任を皇帝以外に転嫁するため、劉永福と黒旗軍がフランスと戦った事実を極力伏せたことは、中国側資料も含む同時代史料から明らかである。劉永福は、保勝防禦使という官職を得てラオカイ（保勝）を根拠地としたため、中国との国境の要衝であり商業センターでもある同地を狙うフランスと死闘をくりかえした。その結果、アジアで初めてヨーロッパ軍に勝利する戦果をあげた。寔録は「保勝防禦使任命」を記さず、劉永福の父への誥封も——寔録の凡例に官吏の父母への封典は明記するの一条があるにもかかわらず——あいまいな表現をとり伏せられている。

これは「子為父隱」の大義の下、阮朝マンダリンが劉永福と黒旗軍を私利（ラオカイを根拠地として勢力圏を拡大する中国人武装隊）のためフランスとの紛争を惹起した、と記録するため事実を隠した例である。「書かない」という書法は、明命帝が『明実録』を入手した際にもとられ

ている。⁽³⁸⁾ 劉永福の場合も『明実録』も傍証によって明らかにされた。「書かれないこと」は何か、なぜ「書かれない」のかは、「史官は誰か」につながる問題である。『大南寔録』の場合、『第四紀』の完成は一八九四（成泰六）年であり、史官が腐心したのはフランス支配下での阮朝の存続であった。

歴史的事実として黒旗軍は、フランスによるベトナム植民地化に抵抗して戦った。天津条約から九年後に完成した『第四紀』は、編纂にあたった阮期マンダリンに黒旗軍記事を操作するに十分な時間を与えたといえよう。

四 東アジア漢字文化圏と実録

本稿では、東アジア共通の史書である実録について「実録体」の存在を提起した謝貴安氏の『中国実録体史学研究』をとりあげた。「実録体」の観点でベトナムの寔録を検討するとうなるか。筆者が追究した事例と比較するかぎり、あえて「実録体」を提起する必要はないと思われる。定義の主となる「編年附伝体」は『明実録』に妥当しても『清実録』には適合できない。謝貴安氏は、清が異民族政権であり「漢化」の度合いが実録に現れているという。とするとベトナムの寔録が、卒伝と独立伝を兼有することは、どのように解したらよいのか。むしろ錢茂偉氏の⁽³⁹⁾ように編年体で附伝・独立伝の二型がある。と捉える方が自然であろう。

謝貴安氏自身が前著『明実録研究』では「総合性編年体」と編年体と定義したにもかかわらず、「編年附伝体」という独立の体裁を提起するに

たった経緯の説明を欠くことも、説得性を弱めている。

「一体二翼」という定義は、直書曲筆は「実録体」の二翼であるばかりでなく、謝貴安氏も認めるとり伝統的史書に共通する特徴である。寔録では、「事実を書かない」という形での曲筆が、フランス統治下で確認できる。これは植民地下における阮朝の存続のためと解される。清との冊封関係があった明命期に『明実録』将来が伏されているのは、朝鮮の事例で理解できる。

さて、「実録体」を提起する専門書は、政府から研究費を得てうまれた。謝貴安氏は同書の一七パーセントを、「実録体史学」遺産の継承問題にあて、「実録体史書は中華文明の精神」であり「中華の伝統的美徳」を伝えると評価している。『清実録』を「少数民族政権の漢化」問題として捉える視点は、漢族主義の影をうつしている。もちろん「孝」「義」といった「伝統的美徳」の含むマイナス面の否定は述べられているが、儒学が中国史学に及ぼした影響の大きさは否定できない。

「一体二翼」とされる直書曲筆も儒学と不可分である。毀誉褒貶は漢字と一体であり、君臣ともに用いた中国史書の特徴である。皇帝は文字による「家天下」の不朽を図り、マンダリンは皇帝権の制肘に活用した。謝貴安氏が、実録は皇帝を核とした中央集権体制が必要とした史書というの的を射ている。皇帝の「家天下」を映す鑑が実録であるなら、欽修を実現した明命帝こそ典型的皇帝といえよう。

謝貴安氏の著述の重点は皇帝におかれている。実録は「国家の大典」であり、「家譜」でもあることは『大南寔録』から読みとれる。寔録が附

伝と独立伝の両者をもつことは、皇帝とマンダリンの力関係を反映していないだろうか。ベトナムの史書は、中国型と東南アジア型の二面性を有する⁽¹⁰⁾。そこでは科挙によって漢学を注入された阮朝の官僚は、中国の官僚とどのような異同をもつのだろうか。マンダリンは、毀譽褒貶を駆使して皇帝の「家天下」を支え特権を享受する。皇帝は毀譽褒貶によってマンダリンを抱きこむ。同じ武器を使う君臣のせめぎあいが残した実録に、事実を読みとるには慎重でありすぎることはない⁽¹¹⁾。

現代の中国でマルクス主義が儒学に代わる地位を占めるなかで、事実を追究することはどういふことなのか。前述の清代檔案学国際學術研討会（二〇〇六年）では、中国が自ら「人類共同の文化遺産としての清代檔案」を公開し共用を世界に呼びかけたことは、一九三〇年代に日本により実録を奪われたことと対照をなす。主導権を握り中国は、自らを世界史に位置づけようとしている。

謝貴安氏の提起した「実録体」については、それが東アジア漢字文化圏のなかで、漢族以外が製作した実録に適用可能である否かを検討する作業が必要とされる。マンダリンという視点から実録について中国とベトナムと朝鮮との異同を再検討する作業である。

ベトナムについて言えば、まったく奇妙な書物が存在する。私撰の『大南寔録正編』である。

『大南寔録正編』は嗣徳二六（一八七三）年に、直轄植民地コーチシナの嘉定で刊行されている。阮朝の寔録と同一の書名をもち、内容も嘉隆帝が西山朝を倒して帝位につく経緯を記す。書名と内容からは『大南寔

録』との区別がつかない。刊行したのは嘉隆帝の中興をたすけた父祖の功業を顕彰する華人達である。三巻本の内容は『大南寔録正編第一紀』世祖高皇帝寔録と酷似し、その奥書には大南と大書されている。一八七三年は、フランス軍によるハノイ占領の年であった。当時のベトナム国民で漢字を解する者のなかには、嘉定の華人のように阮朝をよはす主権者とは認めない意識があった。同書の検討を次の課題としたい。

注

(1) 「新総合体」という新しい体裁は、通紀八巻・典志三九巻・伝記二二巻・史表一三巻・図録一〇巻の五部分計九二巻から成り、伝統的な紀伝体と章節通史体を合せたものである（張永江 大坪慶之訳「近百年來における中国の清史編纂事業と最新の進展状況（下）」『滿族史研究』五、二〇〇六年）。

(2) 張永江「近百年來中国の清史編纂事業及其最新進展」レジュメ。講演レジュメと関連論文（張永江 大坪慶之訳「近百年來における中国の清史編纂事業と最新の進展状況（上）（下）」『滿族史研究』四、五、二〇〇五年、二〇〇六年）は、山形大学人文学部中村篤志教授のご厚意で入手できた。

(3) 中華文史網 <http://www.historychina.net/cus/index.html> 堀地明「パソコン画面で閲覧可能になった北京の清朝檔案——中国第一歴史檔案館信息工程管理系統について」『東方』三一（二〇〇七年一月）。

(4) 馮惠玲「清代檔案資源的整合与共用——從國家清史纂修工程談起」レジュメ。この研討会を主催したのは台湾の中央研究院歷史語言研究所・數位典藏國家型科技計畫内容發展分項計畫・國立故宮博物院である。二〇〇六年一月二日—三日開催。

(5) 中見立夫氏レジュメ（第五八回全国會員總會）。中見氏の指摘する明治期以降の天皇の実録が非公開であることは、注意すべきである。

- (6) 注(1) 参照。
- (7) 一九六二年生れ。湖北省襄陽人。華中師範大学歴史文献学専攻博士。武漢大学歴史学院教授、博士課程指導教員、同大学中国伝統文化研究中心専門研究員。教育部人文社会科学重点研究基礎重大項目「実録修撰与中国伝統史学流変」。二〇〇六年湖北省第五屆社会科学優秀成果一等賞受賞。『明実録研究』湖北人民出版社、二〇〇三年。『中国史学史散論』武漢大学出版社、二〇〇七年。
- 『明末清初「新民本」思想研究』（馮天瑜共著）湖北人民出版社、二〇〇三年。
- 『太玄大戴礼研究』（劉韶軍共著）。『史学史研究』『史学理論研究』『哲学研究』に論文八〇篇余りを発表（『中国実録体史学史研究』著者紹介参照）。
- (8) 『中国実録体史学研究』三頁。
- (9) 同上 一頁。
- (10) 同上 一二頁。
- (11) 同上 二頁。
- (12) 同上 「内容紹介」。
- (13) 同上 二頁。
- (14) 同上 一一―一五頁。
- (15) 同上 四八三―五二八頁。
- (16) 同上 一三〇―一四三頁。
- (17) 『明実録研究』二八三頁。
- (18) 『中国実録体史学研究』四四頁。
- (19) 坪井善明『近代ヴェトナム政治社会史―阮朝嗣徳帝統治下のヴェトナム一八四七―一八八三』（東京大学出版会 一九九一年）一五九頁。
- (20) 『中国実録体史学研究』三九―三九九頁。
- (21) 一六八九年にロシアと清朝が結んだネルチンクス条約については、満州文の方が漢文よりもラテン語に忠実であるという。漢文では「天朝の支配」という前提にたつて文章がくみだてられている。清朝の再評価については欧立德「満
- 文檔案与新清史」（『故宮學術季刊』二四―二、二〇〇六年）を参照。
- (22) 『中国実録体史学研究』三八頁。朝鮮の実録については、孫衛國「『明実録』之東伝朝鮮及影響」（『文獻』二〇〇二年一月）および「『明実録』与『李朝実録』之比較研究」（『求是學刊』三三―二、二〇〇五年三月）を参照。
- (23) 『ナオ・デ・ラ・チーナ』三、二〇〇〇年。中見氏の見解は後述のように二〇〇八年も変わっていない。
- (24) 「第五八回全国會員総会」（財団法人東方学会）掲載レジュメ「日本の東洋史学者と『実録』」。
- (25) 孫衛國「『明実録』与『李朝実録』之比較」は、朝鮮での実録の草稿が漉きかえされ徹底的に破壊され再生紙とされたこと、史庫に納められた実録は国王も見られなかったことを指摘している。体裁は「一種複雑な編年体で『明実録』にない紀伝体の志・表の内容があること」（『世宗実録』は書志類・五札・楽譜・地理志・七吹等を含む）や評論「史曰」が「成宗実録」以降に付けられていることも注意されている。
- (26) A 跡見学園女子大学「フォーラム」一八、二〇〇〇年三月。B 『拓殖大学論叢』二四一（人文・自然・人間科学研究五）二〇〇一年五月。C 同上二五〇（同上九）、二〇〇三年三月。D 『跡見学園女子大学文学部紀要』四一、二〇〇八年三月。
- (27) 林A二〇〇〇。
- (28) 林B二〇〇一。
- (29) 同上。
- (30) 同上。
- (31) 林A二〇〇〇。
- (32) 同上。
- (33) 林D二〇〇八、例えば黄相協は卒伝として附伝されている。黄往炎は反フランス行動を原因として単独伝が立てられなかった（坪井善明、前掲書二一五

頁)。黄相協は黒旗軍と対立した親フランス派の人物で、岑毓英の手で雲南に連行され死亡したが、寔録編纂者の女婿であったため、黒旗軍の暴虐の犠牲者としての寔録に記載された(越)譚春玲 袁仕倉訳「評価劉永福応主要看其積極方面」『印支研究』一九八三(一)。曲筆の一例である。

(34) 注(12) 参照。

(35) 林B二〇〇一。

(36) 同上。

(37) 林D二〇〇八。孫衛国「『明実録』与『李朝実録』之比較研究」は、丙子胡乱(一六三六)の結果、清に屈服した仁祖の後をついだ孝宗以降の実録には、行状・哀冊文・諡冊文・崇陵志といった家譜の内容や資料に酷似した文書が加えられていることを指摘している。

(38) 朝鮮が一八三〇年に谷応泰の旧蔵本を購入した事実は、実録に記載されなかった。清朝に知られるのを嫌ったためである(孫衛国「『明実録』之東伝朝鮮及其影響」)。

(39) 稲垣一郎氏は、実録を「簡単な伝記を含め」在位した各皇帝について起居注を拠り所に当時の歴史事象を書きこみ、国史・正史(紀伝体)の編纂に備えた史料集的性格の歴史叙述、と説明する(『中国の歴史思想——紀伝体』創文社一九九三年。謝貴安氏は本書を使用していない)。錢茂偉氏は、実録体の二つのモデルとして大臣附伝型(唐・宋・明)、大臣伝単独成書型(元・清)をあげる(『実録体起源、発展与特点』『史学史研究』二〇〇四年二月)。

(40) 陳正宏氏は書誌学の立場から、越南本には宋代の装訂方法が残っていること、厳密な避諱が見られそれは同時期の中国とは異なることをあげ、阮朝の皇帝権力の大きさを示唆する(『東アジア出版文化における越南本(ベトナム本漢籍)の意義』二〇〇八年七月四日慶應義塾大学での講演)。

(41) 微言が抵抗の武器となることは、陳垣の生涯にあらわれている(牛潤珍「陳垣对清史研究的貢獻」『清史研究』二〇〇一(一一)。むしろスターリン時代の

芸術家は、「彼らは作品で、表面的に全体主義との靈感あふれる一体性を示しつつ、実は体制を批判する『二枚舌』を使った」という(「よみがえるドストエフスキー(下) 亀山郁夫氏ロシア訪問」毎日新聞二〇〇八年一月二〇日)。日本の例としては「書かなかった」森鷗外がいる。末延芳晴氏の『森鷗外と日清・日露戦争』(平凡社 二〇〇八年)は、「鷗外が書いたことだけではなく、書かなかったことも重視する。なにが書かれなかったか。なぜ書かれなかったか。といって(末延)氏は、戦争の悲惨さを記さなかった鷗外を責めているのではない。むしろ国家に忠実な軍医の鷗外が、文学者である自分を封印せざるを得なかった痛苦に思いを寄せていく」と評されている(川本三郎の書評「軍医と文学者のあいだで揺れた心」毎日新聞二〇〇八年一月二三日)。これらはマンダリンの意識解明の一助となろう。